

2018. 7. 10

日本コミュニケーション学会 九州支部



ニューズレター No. 31

---

目次

**1)巻頭言** 福岡に移住しました！（支部長：池田理知子）

**2)今年度の活動予定**

- ①第25回九州支部大会開催～大分大会について～（大会実行委員長：清水孝子）
- ②支部紀要第16号の経過報告（紀要担当運営委員：平野順也）

**3)会員からのメッセージ**

- ①ピースメーカーの育成にむけて  
（沖縄キリスト教学院大学 仲里和花）
- ②コミュニケーションとしての笑い—障害・表象・笑いの接点を考える  
（神田外語大学 埴幸枝）
- ③ご挨拶にかえて～どんな自分でありたいか～  
（中村学園大学 吉村美路）

**4)年次大会の報告** 学術局セッションの感想（熊本大学 平野順也）

**5)支部会員の出版図書の紹介**

- ①野中昭彦（著）『プレゼンのレシピ』廣済堂出版  
（株式会社コムスキル代表取締役 野中アンディ）
- ②ウェルズ恵子（編）『ヴァナキュラー文化と現代社会』思文閣出版  
（立命館大学客員研究員 宮下和子）

**6)編集後記**

## 1)巻頭言

# 福岡に移住しました！

支部長：池田 理知子（福岡女学院大学）

九州支部長となって4年目、ついに福岡に移住しました。22年間務めた国際基督教大学を3月31日で辞め、4月1日から福岡女学院大学へと異動したことをこの場を借りて報告させていただきます。所属は人文学部メディア・コミュニケーション学科です。

福岡に移ってきて何にまず驚いたかというところ、この街には学院関係者が思いのほか多いということでした。地元では通称「ミッション」と呼ばれている福岡女学院は、133年の伝統をもち、幼稚園、中学、高校、短大、大学、大学院、看護大学と、卒業生を多く輩出しています。しかも、地元志向が強く、卒業後も福岡にとどまる人が多いようです。そうした要因が重なってなのか、市内のいたるところで「ミッション」関係者と遭遇します。たとえば銀行の窓口で口座を開設しようとする、勤務先を記入したとたん担当者が中・高の卒業生ですと名乗り出るとか、居酒屋で飲んでいた隣の女性が大学の卒業生だったとか、とにかくそういった場面が多いのです。外出先で少しでもうまくいかないことがあるとすぐにムツとして、それが顔に出やすい私は、「ミッションがいるかもしれないよ」と夫にいつもたしなめられています。

福岡市南区と春日市にまたがるように位置する福岡女学院は、緑の多い落ち着いた場所にあります。福岡市の中心からは少し外れていますが、交通の便はそれほど悪くはないので、ここ数年、福岡での支部大会が開かれなかったことから、次回開催の候補地の一つになっています。赴任してまだ間もないので、これから開催の可能性を探っていかなければなりません、大分大会の次にみなさまとこのキャンパスでお会いできることになれば、うれしい限りです。キャンパス内はドライエリアとなりますが、大学からバスで西鉄大橋駅に移動すれば、周辺にはおいしい料理とお酒が楽しめる店があります。来年の支部大会を福岡女学院大学で開けるよう、頑張ってみます。

改めて、九州支部の一員としてよろしくお願ひいたします。



学科のブログより

(<http://www.fukujo.ac.jp/university/media/index>)

## 2)今年度の活動予定

### ①第 25 回九州支部大会開催～大分大会について～

大会実行委員長：清水 孝子（日本文理大学）

第 25 回九州支部大会を 2018 年 9 月 22 日（土）、「ホルトホール大分」で開催します。今回の大会のテーマは、「記憶の継承 Part II ～コミュニケーション学の視点から」です。3 年前から九州支部大会では「公害」「戦争」「記憶」をキーワードに議論してきましたが、4 年目の大分大会では長崎大会のテーマを引き継ぎ、さらに議論を深めていきたいと考えています。大分大会では、午後の部を一般公開として、テーマに基づき基調講演とパネルディスカッションを準備中です。

大分大会は占領期に注目します。プランゲ博士によって保管されていた、占領軍による出版検閲のために提出された印刷物などの資料群がメリーランド大学に寄付され、21 世紀になって公開されました。大分には、占領下大分県で発行された検閲雑誌 110 種類・検閲新聞 266 種類などを調査・研究し、地域の先人達の思いを受け止め、地域文化の向上に資することを目的とした活動を行っている「大分プランゲ文庫の会」があります。検閲はあってはならないことですが、本来なら消えてしまっていたであろう資料が検閲によって残り、先人たちの思いの継承という活動につながっているのです。会の

代表の白土康代氏による「プランゲ文庫」の紹介と会の活動についての基調講演に続き、白土氏を含む会員 3 名にパネリストとしてご登壇いただきます。「プランゲ文庫」の関わりについて、それぞれの活動と思いを語っていただく予定です。

#### 活動の記録集 1 号～4 号



最初のパネリストは代表の白土氏です。白土氏は「文庫」に登場する「歌」に注目します。占領期には「りんごの歌」のように敗戦により荒廃した人々の心を励ます歌が多く生まれましたが、大分県内でもさまざまな歌が生まれています。たとえば、シベリア抑留兵を迎えるための歌「北海越えて」、進駐軍基地で働く人々向けの雑誌に掲載されていた「ついおく」、復興を励ます「大分音頭」、地域のまとまりを目

指す「糸口音頭」などです。歌の再現だけでなく、「歌の力」が戦争の記憶の継承の一つの手段になりうることを話されます。次のパネリストは、OBS大分放送報道部記者兼番組プロデューサーの佐藤陽子氏です。「文庫」の資料を活用してニュースや番組も制作されています。2015年制作のOBS報道特別番組「戦後70年 幻の首藤コレクション」、2016年に全国放送された「生きて“カエル”～海軍士官が書き残した書～」という番組制作の他にOBSニュースの特集「つなぐ戦争の記憶」も取材されています。最後のパネリストの小野弘氏は、別府の近代史を研究されています。小野氏は、「多くの人が入ってきては去って行く町・別府

から生まれる多くの物語」に注目しています。大正・昭和初期の発展期に県内外から多くの人たちが別府に入り、次は戦後に多くの人たちが入ってきたという2回の人口流入の時期があった別府の歴史をひもとくために、「文庫」と関わっておられます。以上3名の方々にそれぞれの立場や思いから「プランゲ文庫」について語っていただき、会場みなさんと「記憶の継承」について議論を深めたいと思います。

論文発表やパネルの企画の受付は7月15日（日）です。九州支部以外の方の発表も大歓迎です。9月下旬の大分はまだ暑い日々が続いているとは思いますが、是非、大分の地でお会いできることを心よりお待ちしております。

2018（平成30）年度 第25回支部大会

1. 日時：2018年9月22日（土）
2. 場所：ホルトホール大分（大分駅 上野の森口から徒歩2分）
3. 大会テーマ：「記憶の継承 Part II ～コミュニケーション学の視点から」
4. 大会実行委員長：清水孝子

- 研究およびパネルディスカッションを募集します ●  
発表の申込み締切：7月15日（日）  
※大学院生の研究発表に対しては補助金を給付します。

## 2)今年度の活動予定

### ②支部紀要第16号の経過報告

紀要担当運営委員：平野 順也（熊本大学）

紀要委員長として今号と次号も担当させていただくことになりました。どうぞよろしくお願ひいたします。昨年度『九州コミュニケーション研究 第15号』が大きな問題もなく刊行されたのは、皆様のおかげです。この場を借りて、感謝申し上げます。研究成果を投稿して下さった先生、査読を担当していただいた先生方、そして特別企画に協力して下さった先生方に御礼申し上げます。

さて第16号ですが、今年度は投稿数がゼロだったため第2次募集を行ないました。残念なことに、それでも投稿はございませんでした。最近、投稿論文数が少なく、委員長として責任を感じざるを得ません。しかし、その後お一人の先生から研究発表論文を投稿していただけるとのご連絡をいただきました。少しでも充実した紀要を刊行するためとのご配慮だったと思います。感謝の念に堪えません。

第48回年次大会での支部会でもこのことが話し合われました。現在は1月末に投稿締切、そして9月に刊行というスケジュールですが、なるべく年度内に研究成果が発表されるようなスケジュールに変更しても良いのではない

かといった妙案も頂きました。紀要を刊行しているのはJCAの中でも九州支部のみです。この九州支部特有の活動を先細りさせないように対応を考えていく予定です。また、毎回このようなお願ひをするのも申し訳ないのですが、紀要を継続させていくためにも、一人でも多くの先生方のご協力をお願いしたいと思います。

投稿論文数は少ないですが、16号もこれまでと同様に支部大会でのシンポジウムを軸とした充実した特別企画を掲載いたします。昨年度は長崎で支部大会が開催され、そこでは平和学習、対話や継承といった鍵語を中心に2つのパネルディスカッションが行われたことは、皆様の記憶に新しいことと思います。今回の特別企画の主旨は、パネリストとして参加された先生方に、加害者と被害者という両方の立場から平和教育を再考していただくというものです。当時強制労働を強いられた外国人は、これまで平和教育を取り巻く言説に積極的に参加を許されたわけではありません。これからの日本に、そして世界に必要な平和教育とは、加害者と被害者という、それぞれの声を共鳴させることによって構築できるのではないでしょう

か。第 14 号は水俣、第 15 号は熊本を中心に特別企画がまとめられてきました。第 16 号は長崎での議論を中心とした興味深い内容になるはずです。

そして次号をもって、このシリーズは一旦完

結しますが、第 17 号は熊本県水俣市で始まり 4 年に渡り続いた特別企画の集大成としてまとめる計画です。こちらの編集にも数カ月後には着手します。ご期待ください。

### 3) 会員からのメッセージ

#### ① ピースメーカーの育成にむけて

なかざと かずか  
仲里 和花 (沖縄キリスト教学院大学)

2016 年、沖縄キリスト教学院大学人文学部英語コミュニケーション学科に赴任しました仲里和花と申します。本学院では、異文化コミュニケーション 1 & 2、コミュニケーション入門、比較文化、異文化交渉演習などを担当しています。初年度は、前任者の伊佐雅子先生の講義要項を参考に、試行錯誤で授業の内容を考案してきました。今年で 3 年目を迎えますが、現在は、講義に加えて、グループワークなども取り入れ、参加型授業を実践するよう心がけています。

今日は、本学院の建学の精神を引用しながら、今後、私が異文化コミュニケーション学の教育を通して、どのような人材育成に関わり、どのような教員を目指すのか、私の考えを述べてみたいと思います。

本学院の建学の精神には以下のことが書かれています。

「沖縄キリスト教学院は、プロテスタント福音主義に則るキリスト教精神を土台に沖縄を国際的平和の島にしてゆく人材の育成を目指し、・・・・沖縄キリスト教団の指導者達によって 1957 年に建学された。そこには、これらの人々の太平洋戦争下での皇民化教育への反省と沖縄再建の強い願いがあった。」

沖縄は太平洋戦争下で悲惨な戦争体験をし、その中で、クリスチャン指導者達もまた、時流の波に逆らえず、「お国のために死んでこい」と多数の教え子達を送り出し、戦死させました。その反省にたって、「国家のために死ぬ教育ではなく、個人の人権が尊重されて生きるための教育」を実践しようという理念で本学院が建て

られました。また、「本学のキリスト教精神とは、聖書が証するイエス・キリストの十字架のあがないにより人類に示された和解と平和に基づき、他民族と異文化の理解を深め、他者へ仕え、少数者の人権を尊重するものである」とあります。

沖縄には、「万国津梁」という言葉がありますが、これは琉球王国がアジア諸国との平和外交を通して大交易によって栄えた時代のことを指します。まさに、琉球王国は平和的共存共栄の世界を目指していました。このような歴史を踏まえて、本学院の創立者達は、戦争をする人間ではなく、平和をつくり出す人間、ピースメーカーの人材育成を目指して本学院を建学しました。

石井敏先生は、著書『はじめて学ぶ異文化コミュニケーション』（有斐閣選書）のなかで、「異文化コミュニケーション学では、人間が持つさまざまな文化的差異を研究対象とし、個々

の違いを人々が乗り越え、理解し合うための方法を模索し、結果的にはあらゆる人が自分の可能性を發揮できる『平和的』な社会の構築に資することを目指している」と述べています。

まさに、これは、私たちが平和的共存共栄の世界を目指し、ピースメーカーを育成していく上で、必要不可欠な理念だと思います。グローバル化の時代にあって、私たちは異文化を背景に持つ他者と向き合い、理解し受け容れ、相互に違いを乗り越えてわかり合えることができるのだろうか、他者と共生し平和な社会を構築していくために、私たちはどのような異文化コミュニケーション能力を培っていけばいいのか、学生達と一緒に模索していけるような授業を展開していきたいと思っています。今後とも、ピースメーカーの人材育成に資することを目指して、異文化コミュニケーション学の教育、研究に携わっていきたいと思います。ご教示の程、よろしく願いいたします。

### 3) 会員からのメッセージ

#### ② コミュニケーションとしての笑い

#### — 障害・表象・笑いの接点を考える

ばん ちきえ  
埴 幸枝 (神田外語大学)



今年度より神田外語大学に所属している埴

幸枝と申します。昨年度までは、池田理知子先

生のご指導のもと、国際基督教大学博士後期課程で研究を行なってきました。研究活動の拠点は東京なのですが、池田先生からお誘いいただき、九州支部には2015年から所属しています。昨年度、はじめて九州支部大会に参加させていただき、JCA年次大会とはまた一味違う活発な議論に触れ、大きな刺激を受けることができました。

これまでの研究では（といっても、まだ研究経歴自体がとても浅いのですが）、「笑い」という事象をテーマの主軸に据えてきました。「笑い」の研究は諸分野に散見されるテーマではありますが、それが一つの研究領域として確立されていないこともあり、どの立場から眺めるのかによって「笑い」の捉え方も様々です。そうした状況のなかで、私はコミュニケーション研究の視座から「笑い」を考察することを選びました。「笑い」がその場の限定的な状況設定だけではない、社会的なコードや権力構造によって規定される営為であり、「人と人との関係性」を映し出すものであることから、それをコミュニケーションという観点から検討していくことには意義があると考えています。

博士課程では、「障害者表象と笑い」の問題を扱ってきました。「障害者」と「笑い」という二つの要素の接続は、一見するとふさわしく

ないように思われるかもしれませんが。しかしそのような感覚にこそ、私たちが社会的に「障害者」をいかなる存在として位置づけようとしているのか、また「笑い」をどのようなイメージとして受容しているのか、ということが如実に反映されています。本研究では、「障害者と笑い」の関係をめぐる歴史的・社会的変遷に目を向けながら、障害者が「みる／みられる」という構図のなかでいかなる抑圧にさらされてきたのかを探ってきました。なおかつ、それを表象の水準において論じてきたのは、障害者表象が社会における「障害認識」や「障害者観」と相互的な関係にあるからです。上記の問題意識は、表象の意味が所与のものとして内在するのではなく、それをみる人々のまなざしによって生成されるものである、というより広範な視点にもつながるものでした。

これまでの研究過程をふまえ、今後の研究では博士論文執筆のなかで浮上してきた新たな課題に取り組みたいと思っています。その一つが、「みる」という行為——メディア表象を視聴するという行為がどのような制約のなかで実践され、またそれがいかなる社会的統制力を帯びうるのか——の焦点化です。九州支部の皆様には今後ともご指導賜りたく、よろしくお願ひ申し上げます。



### 3) 会員からのメッセージ

#### ③ ご挨拶にかえて

～どんな自分でありたいか～

吉村 <sup>みち</sup>美路 (中村学園大学)



大学で教えるようになり、ようやく1年が過ぎようとしています。民間企業とは180度違う環境で四苦八苦、しかし新たな発見と感動の連続でした。皆様に自己紹介もかねて、ここまでの道のりと現在携わっている研究について、少しご紹介したいと思います。

わたしは大学では心理学を学びました。その当時の教授の仰ったことで、その後のわたしの進路に大きく影響を与えた忘れられないエピソードがあります。それは、大学付属のカウンセリングルームにいらした、ある50代の男性のお話です。

その方は営業マンでした。入社以来一生懸命努力を重ねてこられました、営業成績がほとんど毎月最下位だったそうです。「自分が営業職に向いていないのはわかっている。でも、高校卒業以来この仕事しかしてこなかったので、今さらキャリアチェンジはできない。自分より一回りも二回りも年下の部下がどんどん成績を上げていく。辛くて辛くて仕事を辞めてしまいたい、自分には妻も子供もいて、今辞めるわけにはいかない」、と言うのです。もう何年も薬を飲みながら仕事を続けてこられたとの

事でした。

その方は少し特徴的な外見をされていました。ご本人もその事が営業成績に影響していると仰っていたようですが、確かに初対面では好意印象を与えづらい外見だったようです。なんとかしてやりたいと思った教授は、その方に、あるアドバイスをしました。アポイントを取った際、電話を切る前に「ある言葉」を言いなさいと。なんだと思いますか？実はこの営業マンは半年後に社内でトップの成績を取り、表彰されているんです。すごいですよね。たった一言が人を変える効果を持つんです。

「僕、おもしろい顔しているんです。だから、楽しみにしててくださいね。」

これは心理学でいう“初頭効果”を応用した事例です。

このエピソードは、当時よく社会を知らないわたしに大きなインパクトを与えました。「もまれてみたい。色々な人生を見よう。視野を広げて、色々な立場の人を理解できるようになろう。人に貢献できる人材になろう。」

その後、大学院を経て人材系の企業でコンサルタントとして働いてきました。転職斡旋がわ

たしの主な業務でしたが、職業を扱う仕事は、クライアントの人生を掘り下げながら相談にのっていくような仕事です。様々な人生を見ました。「どんな自分でありたいのか」、この問いはわたしたち誰もが一度は自身に問いかけたことがあるものなのではないでしょうか？職業の選択はこの問いに大に関わってきます。

「職業は個人にとってどのような意味を持つのか」、「役割を持つ意義とは何か」をクライアントと常に考えていく環境でした。

わたしは研究一筋というわけではありませんでした。貴重な経験をさせてもらえたと、

心から感謝しています。

現在の主な研究分野は「メンタルマネジメント」です。落ち込みやすくても、実はネガティブでも、それをなんとかしてでも調整していく能力を身につけられれば、社会で、地域で活動できる。人が自身に問いかける「ありたい自分」はその走り続けた延長線上にあると思うのです。今後は研究者として、この分野で精進を重ね、人に貢献できるような自分でありたいと思っております。

今後とも、どうぞよろしくお願い申し上げます。

#### 4)年次大会の報告

### 学術局セッションの感想

平野 順也 (熊本大学)

札幌医学技術福祉歯科専門学校で6月9日から10日にかけて開催された第48回年次大会に参加しました。2日目に出席した「コミュニケーション研究者とコミュニティ:支部長からの提言」と題された学術局セッションについて報告します。本セッションは日本コミュニケーション学会というコミュニティの将来を、支部というサブ・コミュニティの活動を中心に議論するために開催されたものです。



セッションは、司会の森泉先生が、日本コミュニケーション学会についての危機感を出席者と共有することから始まりました。学会の会員数にはさほど変化はないものの、年次大会

が若干小規模化しているようです。過去4年間の大会では毎年約20件の研究発表が行われてきたようですが、今回は9件に留まったとのことでした。このような危機感は各支部でも共有されており、支部大会や研究会、勉強会を開催しても出席者の数が伸び悩んでいるようでした。しかし、このような問題は決して近年現れたものではなく、以前から存在していたという指摘もありました。また、支部活動に積極的に参加される先生方も特定の人々に限られてしまうため、窓口を広く、新しい先生方の参加を促しながら、支部活動の拡大に努めなければならないということは、各支部長の共通認識であると思われました。

九州支部の活動が報告された時は、若干雰囲気が変わったのが感じられました。支部長の池田先生から、コミュニケーション学と地域との接点を構築するという方針で、数年前から支部活動が実行されているということ、そして支部大会も盛況であるとの報告がされました。九州支部大会においては最近では10件ほどの研究発表が行われております。シンポジウムや基調講演には学会員だけではなく地域の方々にも参加していただけるように、新聞報道を積極的に利用して告知や報告を行っています。メディアの活用も告知にとどまらず、地域との接点を強化するためのものとして機能しています。大

学院生や他支部所属の先生方が研究発表を行っていることも、九州支部の特色の一つでしょう。新しい研究者の育成や、支部を超えた交流が行われているのが九州支部の魅力だと実感しました。

セッションの後半では支部活動の可能性について種々の意見が交わされました。各支部の活動はそれぞれ個性的であり、発展することを目指すよりも現状維持で構わないという意見もでました。しかし、各支部長が懸念されていたように、支部がコミュニティとして十分機能しているか否かという点、あまり楽観的ではないと感じました。九州支部でも紀要のことなど改善すべき点が存在することも確かです。これからも親密なコミュニケーションを通して支部活動が活発に行われるように努めていくことが必要でしょう。

学会とは研究者の共存共栄を支援するための団体ではないでしょうか。この団体は研究者の貢献によって成り立つ「ギルド」であるともいえるでしょう。この「ギルド」は支部という下位「ギルド」によって支えられていることも確かです。今後も九州支部が、日本コミュニケーション学会の中で特有な位置を占める存在としてあり続け、コミュニケーション研究の進展に貢献できるように、皆様とともに取り組んでいきたいと思われました。

## 5)支部会員の出版図書の紹介

### ①野中アンディ（著）『プレゼンのレシピ』廣済堂出版

野中 アンディ（株式会社コムスキル代表取締役）

先日の話。名刺交換をした方から「野中アンディさんってプレゼンの本書かれてませんか？そうでしょ？立ち読みしてて気になってたんですよ、あの本！」と言われ、買ってくれたらいいのに...と思いつつも拙著が書店に並ぶということのインパクトを少しばかり感じたところです。

2017年3月に私は大学を退職し起業するという少し変わった選択をしました。大学教員は時に企業研修や勉強会などの講師に呼ばれることがありますよね。コミュニケーション学の授業を教えてきた私も企業から依頼を受け講演や研修を行いました。すると企画の段階で「コミュニケーション学ってコーチングでしょ」とか「NLPとはどう違うんですか」とコミュニケーション学の認知度が非常に低いことを感じました。同時に企業研修はコーチング等に依存しており、彼らのマーケティング手法が認知度向上に大きく貢献していることを実感しました。

そもそも私は1992年に交換留学生として初めて渡米し、Public speakingなどの授業を大学で学びました。その時の衝撃は大きく、「こ

れを知らない日本人は世界を相手にできない」と強く感じました。この学問を日本中に広める仕事に従事したいと願った私は、大学院へ進み大学の教壇に立ちました。日本社会に意識変化が起こったのは2007年にスティーブ・ジョブズがiPhoneを発表した時でした。背後で映像や写真を流し、ステージ上から観客に語りかける彼の発表スタイルに日本中が度肝を抜かれたのです。それ以来日本では“パワーポイントを使えばプレゼン”といった誤った認識が広まりました。レトリカルキャノンを無視して形から入ってしまったのです。今でも多くの企業で資料とセリフをふんだんにパワポに載せてそれを読み上げる、プレゼンと称した朗読会が行われています。私にはずっとそれがジレンマでしたが、いつか自分の教え子たちが変えてくれるのではないかと期待していました。



しかし、年間に数十人から百人程度の学生しか教えられない環境では、すでにマーケットとして確立されたコーチングの牙城を崩すのは無理であるかのように思えました。少なくともビジネスで行われるプレゼンはコミュニケーションであり、その目的が説得であることを多くの人に知ってもらう必要性を常々考えていました。自分が携わってきた学問を発展させるために自分にできることは何だろうと考えていた私は、限りなく簡素化され、基本を教えるビジネス書を出版することがその第一歩になるのではないかと感じたのです。またしばらくビジネスに傾倒していたら、これまでの経験を生かし、自らが社会に飛び出るのも悪くないと

思い始め、今に至ったというわけです。

Thesis statement も Topic sentence も全く度外視してプレゼンに臨んだり、論理的な会話を求めたがるビジネスパーソン（彼らはビジネスパーソンたちと言いたがりますが）に、形ではなく骨組みを教えると彼らはこの学問の有用性に初めて気づきます。そしてプレゼンが適切かつ効果的なコミュニケーションと通底していることを知ると、彼らが本当に必要としているのはこの学問であることに気づきます。

プレゼンのレシピ。これに沿って作るだけで絶品のプレゼンが完成するレシピです。大学の教科書としても使える基礎的内容で構成されていますので是非ご活用ください。

## 5)支部会員の出版図書の紹介

### ②ウェルズ恵子（編）『ヴァナキュラー文化と現代社会』 思文閣出版

宮下 和子（立命館大学客員研究員）

立命館大学「ヴァナキュラー文化研究会」（ウェルズ恵子代表）にお誘いいただいたのは発足間もない10年ほど前だった。2010年3月には米留学時の恩師サイモン・ブロナー博士の同会での講演会を機に、「是非九州でも！」と福岡アメリカンセンターでの講演も実現した。さらに2013年12月、米国から音楽学者とアー

ティスト（計4名）を招致し本邦初「スティーブン・フォスター：国際シンポジウム & レクチャー・コンサート」が実現した。その間も会員数は増加し、今や「小さ



な学会のよう」(代表弁)に拡大している。

本書は、同会の研究活動やプログラム成果を基軸に、多岐分野の研究者による多角的論考を<ヴァナキュラー>という切り口でショーケース化したものである。編者は「はじめに」で、「本書でいう『ヴァナキュラー文化』とは、ある集団の人々の生活に深く関連した文化と、特定の時期や時代や状況や土地で発生した文化、および、そうした文化の底流となっている伝統を指している」と述べている。内容はⅠ生成・創造(1～5章)、Ⅱ伝承・変容(6～10章)、Ⅲ拡散・再生(11～15章)の3部構成で、テーマはアメリカの暴力、日系アメリカ人強制収容、医療現場でのユーモア、アメリカ黒人民話、人種暴力、遊牧民女性の技、メディアとオリンピック、<ヴァナキュラー>の実践、日本でのアメリカ音楽の受容、スティーブン・フォスターとアメリカ、さらにその日本への遺産、歌と音楽を取り戻すとき等々、万華鏡のような多様性に満ちている。

筆者が担当した14章「スティーブン・フォスターの生涯と日本への遺産」は、12章「明治期日本におけるアメリカ音楽の受容」(和訳)と13章「スティーブン・フォスターとアメリカ」(和訳)と一連をなす。前章の両原著者はアメリカ音楽学会(Society for American Music)に属し、前述した2013年の国際プログラムでは、前者のハウ氏はパネリスト、後者の

ピッツバーグ大学フォスター記念館のルート館長は基調講演を務めた。

筆者の14章は、米国初の歌謡作家スティーブン・フォスター(Stephen C. Foster, 1826-64)について、まずその生涯と歌曲を概観し、次にフォスターのヒットソングの舞台となった19世紀の大衆演芸、(黒塗りの) ミンストレス・ショーを概説した。最後に日本とフォスターとのかかわりについて、ペリー来航以降のフォスター歌曲の受容の歴史をたどった。明治初期、文部省唱歌として音楽教育に導入され、讚美歌としても歌われ、20世紀前半にはラジオ放送で全国に浸透したフォスター歌曲が、太平洋戦争を乗り越え、戦後音楽教科書に復活し、21世紀の今「日本化」の様相を見せる。当初は権威的唱歌として日本に移植された異文化のフォスター・メロディが、160年余の受容プロセスを経て今なお日本で愛され、いわばヴァナキュラー化している姿は、米国の「フォスター像」には見られない日本への貴重な遺産といえる。補足となるが、本年3月16日放送のNHK番組「らららクラシック」のフォスター特集で、ゲストのアメリカ人ギタリスト、マーティ・フリードマン氏が、「アメリカの伝統音楽というとフォスターしか浮かばない」と前置きした上で、「日本人はフォスターの幸運な部分を満喫している」と述べたが、それはまさに日本の「フォスター像」を投影していた。

## 6)編集後記 横溝 彰彦 (久留米工業高等専門学校)

私が日本コミュニケーション学会に入会して、早いものでもう16年になります。入会后、早い段階から九州支部の運営委員を拝命したおかげでさまざまな出会いに恵まれ、学術的なことは勿論のこと、それ以外にも人生やそれぞれの職場のことなど、たくさんのことを学ばせていただいたり、相談にのっていただいたりしました。年に1～2度の九州支部の運営委員会は支部を運営するための真剣な審議の場ではありますが、近況報告を含めたざっくばらんな

情報交換をする情の通った社交の場でもあります。論文集などで主に情報収集をするために所属している他の学会よりも強い思い入れがあり、ありがたいことにいつの間にか「ここが自分のホームだ」と思えるコミュニティになっていました。

まだ私がお話させていただけていない方々ともこれから先、交流の機会が持てますように。そしてこのニューズレターがそのきっかけの1つにでもなってくれば幸いです。

---

発行元：

### 日本コミュニケーション学会 九州支部事務局

〒874-8577 大分県別府市十文字原1-1

立命館アジア太平洋大学 教育開発学修支援センター 筒井久美子

電話：0977-78-1111 メール：kyushu@caj1971.com

URL： <http://www.caj1971.com/~kyushu/>

---